

“多様性について”

小山 和也

私は金融機関に40年余り勤務し、うち10年以上、市場部門に携わってきました。その経験の中で、いわゆる金融市場における重要な要素の1つである市場参加者の多様性について、若干の考えを述べたいと思います。

金融市場では、株式や債券の売買、すなわち市場参加者の需給によって価格や金利が都度決定されます。健全な市場は、取引量（ボリューム）も重要ですが、あらゆる多様な参加者が取引することが大変重要であります。それは、あたかも会議において、様々な意見の中で1つの物事が決定されるのと同様に、あらゆる目的や様々な価値観を持った人々の総意によってこそ、合理的な価格や金利が決定されるのだと思います。

それでは、市場参加者とは何かということですが、まず、金融機関、様々な事業会社、政府資金、年金資金等のファンド、外国の投資家、それと個人です。

こうした多様な参加者による市場は、決して1つのグループだけの取引（売買）によって価格が乱高下しない厚みのある市場となります。また、上場企業は株式市

場を通じて、市場参加者（投資家）から叱咤激励されていると同時に、監視されているという側面もあります。常に、上場企業は投資家から利益状況はもちろんコンプライアンス面や社会貢献活動等、様々な企業活動を見られています。そして、これらの情報が公平に確認できるよう、収益状況だけでなくあらゆるイベントについて速やかに開示しなければならないルールが定められています。従って多様な参加者で構成されている厚みのある市場が、真に価値ある企業を育成し、その環境を整えることとなります。

「貯蓄から投資へ」ということが言われて久しいですが、現状、日本においては個人の株式保有者（市場参加者）は米国等に比較してまだ少ないのが現状です。しかし、私は、個人の株式参加による株価バブルをあおる意図は毛頭ありません。確かに、株式等は元本が棄損することもあり、不確実性があることも事実です。最近では、ウクライナ問題等で株式市場は大幅に下落しました。

ただ、前述したように、市場において個人投資家が増えその結果参加者の多様性が図られることにより、市場の厚みが増し健全性が高まる側面もあります。

投資（資産運用）というのは、不確実性の中で、長期的な経済成長の果実を確保する手段であると理解する必要があると思います。

日本のGDPは長期に停滞してきましたが、それを上回る成長をみせている企業

も多数あります。超低金利が長期に亘^{わた}っていることもあり、預金による金利収入に対し、株式の配当金ははるかにその何倍も上回っています。

企業の成長に個人が関与し、その果実（配当）を享受することは、経済全体の成長の恩恵を受けることと同じだと思います。金融教育においても資産運用面の技術的なものと併せ、こうした金融市場を通じた経済のダイナミズムについても学ぶことが重要ではないかと思います。

☆

☆

☆

私は教育についての素人ではありますが、多様性を学ぶということは大切であると思います。

ずいぶん前になりますが、教師である知人から、初等教育においては、少数精鋭ではなく、多様な児童生徒が集って学ぶことが大切であると聞いたことがあります。

それぞれ得意なものも違い、家族の職業も異なり、育った環境も様々な者同志と一緒に学ぶことが大切だと言うのです。それは、おそらく小さい頃から、自分とは違う考え方や得意分野をもっている人間が多数いることを実感できるためだからだと思っています。

即ち、多様な価値観が存在することを経験することが大切なのです。そしてそれぞれ得意・不得意があることで、少しの優越感や少しの劣等感を味わうことにより、自分に対する自信と他者の痛みを知ることができるのかもしれませんが。

そうした意味で、地域の公立学校の教育環境は優れていると思います。これからは、自分の個性を伸ばすとともに、多様性を尊重し、様々な価値観を許容していくことがますます求められる世の中になるのではないのでしょうか。

[2024.2.5 掲載]